

ヘレニズム時代の都市と土着住民

——初期セレウコス朝の都市建設・植民を対象として——

大 戸 千 之

【要約】 初期セレウコス朝が展開した都市および軍事植民地の建設活動は、ギリシア・マケドニア人の東方進出を、もつとも具体的に示したものであった。本稿は、これらの都市・軍事植民地の多くが、なんらかの形で既存の住地を利用したとみられる点に着目し、異なる民族の共存のあり方を、個々の事例にそくして検討する。その結果、各地において事情はさまざまであり、ギリシア・マケドニア人たちは、地域の特異性に留意しつつ、異民族への対処のしかたを模索せざるをえなかったこと、協力関係の成立をみることはあつても、融和と安定は容易に実現されがたかったことが指摘される。

史林五六卷一号 一九七三年一月

セレウコス朝が「槍ドリックによって獲得した領土トリス・コロサ」の経営に勇躍のりだしたとき、まず直面せねばならなかった枢要の問題は、新しい領土に王権を定着させ、支配体制を確立するための方策を、どのような形で施行するかということにつきいた。彼らとは異なる民族の文化・伝統が息づく茫漠として広大な領土、これを統轄するにあたっては、さしあたりアカイメネス朝ペルシア帝国の遺制を踏襲することに、ひとつの道が求められたのであったが、他方、支配民族たるギリシア・マケドニア人が、国内に揺るがぬ根を張ることも、また必須の要件でなければならなかった。ここに展開されたのが、「古代世界におけるもっとも驚嘆すべき所業のひとつ」^①とさえ評される、かの都市建設・植民政策であったことは、すで

に周知の事柄に属しよう。こうして都市建設・植民政策は、初期セレウコス朝の支配の根幹にかかわる問題として、歴史の舞台に登場したといえるのであり、その帰趨は、王国の命運を象徴する意義を、本来的にもつていたのである。

それではギリシア・マケドニア人の王国内定着は、具体的にはどのような行なわれたであろうか。まず場所の選定がなされねばならない。そのさいには、政治的・軍事的・経済的事情をふまえて、各地の動向や交通ルートの問題、あるいは土地の地形・地味など、さまざまな点が考慮の対象となったであろうが、結果的に、なんらかの形で既存の住地を利用した場合が少なくなかったことは、おそらく自然のなりゆきであったと思われる^⑥。

例えば、プリニウスによると、マイアンドロス河畔のアンティオケイアの地には、以前シユンマイトスとクラナオスというまち (oppida) があつたという^⑦。このことから、ギリシア・マケドニア人の住みついたカリア人のまち (あるいは村落) が発展し、さらにシユノイクスマスを行なつて都市を形成した、という推測が提起されている^⑧。ただ、ここで如上の名前からカリア人のまちを推測するのは、やや性急であるかもしれない。それらは新建設による軍事植民地であつたとも考えられるからである^⑨。

いまひとつの例をひこう。同じカリアのニュサについて、ストラボンが次のように伝えている。スバルタからやつてきたアテュムブロス、アテュムブラドス、ヒュドレロスの三兄弟が、それぞれ都市を建て、自分の名をとつて命名したが、のちにこの三都市が人口減少したので、住民をあわせてニュサが建設された。しかし、ニュサの人々はアテュムブロスを創建者とみなしている、と^⑩。ここでいわれているシユノイクスマスに関しては、その史実性、時期など問題のあるところだが、ステパノス・ビュザンティオスの記事や碑文史料によつて、少なくともアテュムブラの成立については、セレウコス朝が深いかわりをもつたと考えることができる^⑪。そしてその場合、先の三つの名前がいずれもあきらかにカリア名であることは、看過できぬ意味をもつ。ニュサがカリア人の村落を土台にしてきたことは疑えぬところとなるからである^⑫。

古くから知られた都市によつた例としては、メソポタミアの北部、ミュグドニアのアンティオケイアをあげておこう。

ここは往昔のニシビスであり、セレウコス一世によるギリシア・マケドニア人の移住と都市の再編成をへて、ギリシア都市としての歴史を開始した。^⑩

だが、このようにして都市建設・植民が行なわれた結果、新来のギリシア・マケドニア人と土着人は、どのような形で共存することになったのであろうか。

小稿は、こうした疑問に出发する。たしかに、手掛りはいまのところきわめて乏しいといわざるをえない。先にあげた三つの事例をも含めて、既存の住地との関係が知られるのは、ほとんどの場合、名前の変遷のみが根拠であり、住民の実態について如上の関心に応ずる材料はわずかだからである。^⑪が、小稿では、乏しいなりに許される範囲での模索を試みてみたいと思う。さしあたってなすべきは、住地・住民構成からみたギリシア・マケドニア人と非ギリシア・マケドニア人のかかりあいについて、関連史料を収集し、整理と吟味を与えることであらう。

なお考察の対象とする時期は、しばらく初期セレウコス朝の活動に注目する意味で、セレウコス一世（治世 前三二二～二八二）からアンティオコス三世（治世 前二三三～一八七）にいたる約一世紀間に限定する。^⑫

① W. W. Tarn, *Hellenistic Civilisation*, 3rd ed. revised by the Author and G. T. Griffith, 1952, p. 126 (以下 Tarn, *HC* 略記す)

② Cf. C. Préaux, *Institutions économiques et sociales des villes hellénistiques, principalement en Orient, Recueils de la Société Jean Bodin*, VII, 1955, p. 94; W. W. Tarn, *The Greeks in Bactria and India*, 2nd ed., 1951, p. 7 (以下 Tarn, *GBI* 略記)。主要な交通ルート沿いのすぐれた可住地には、古くから村落、小邑、都市が存在しており、それらを利用することは、統治政策の面からも生活上の便宜からも、有利とみなされたであらう。

③ Plin., *NH* V, 29, 108.

④ A. H. M. Jones, *The Cities of the Eastern Roman Provinces*, 2nd ed., 1971, p. 43 (以下 Jones, *CERP* 略記)。cf. id., *The Greek City from Alexander to Justinian*, 1940, p. 15 (以下 Jones, *Greek City* 略記)。ステムノス・ヨハザンティオスはアンティオコス一世が建設したと記している (Steph. Byz., s. v. *Ἰερσόγεια* [11])。しかし、この項におけるステムノスの説明は、アンティオケイアがアンティオコス一世の母の名を、ラオディケイアが姉妹の名を、ニュサが妃の名をとって命名されたとするなど、不正確ないし疑問の点が多く (母はアパマ、妃はストラトニケが正しく、ラオディケイアという姉妹の

名は知られざる。cf. Stahelin, 'Laodike', *RE* XIII, [1924], Sp. 699-712). 信濃住居と云ふ。かくて建設の時期は不明であるが、初期セリウロス朝の都市建設活動の一環とみることに異説はないであろう。cf. V. Tschirikower, Die hellenistischen Städtegründungen von Alexander dem Grossen bis auf Romerzeit, *Philologus*, Suppl. XIX, Helt I [1927], S. 27 (以下 Tschirikower, Städtegründungen, 2 巻記); K. J. Beloch, *Griechische Geschichte*, 2. Aufl., IV, 1925, S. 259; Tam, *HC*, p. 150-53; Jones, *CERP*, p. 43.

ヌテムノスはヌテ・アンティオケイアが、かつてはゴットポリスと呼ばれたと述べているが (s. v. *Antiocheia* [11])、別の項では、ゴットポリスは後のヒュサとあつたことになり (s. v. *Isogoras*)、混乱があつて採用しがたう。チエリロウマーは、アンティオケイアがシモノイキスモスによつてできたことから、ビュトポリスの住民が一部はアンティオケイアに、一部はヒュサに吸収されたと解釈できるところが (Tschirikower, Städtegründungen, S. 27)、充分説得的とはいへなからざる。

⑤ 同じくは、プリキキアのリュコス河畔のラオティケイアの前名ロヌス (Plin., *NH* V, 29, 105) に同じくゴットポリとがべきよう。ただ J. T. R. S. Broughton, in *An Economic Survey of Ancient Rome* (ed. by T. Frank), IV, 1955, p. 640 を参照せよ。

⑥ Str., XIV, 1, 46, p. 650.

⑦ ステムノスに於て、ヒュサはもとアテュムブラと呼ばれ (s. v. *Ἀθούβρα*)、建設者はマンティオロス一世で、命名はその妃の名に由来した (s. v. *Antiocheia* [11]) と云ふ。亦た、前二八一年、マンティオロス一世のマンティオロス (のちのマンティオロス一世) が、マテラとヌチの使節の申し出に好意を示したのを記す碑文 (V. von Diest, *Nysa ad Maeandrum* [*Jahrbuch deut. arch. Instituts*, Ergänzungs-

heft X, 1913], S. 63 = C. B. Welles, *Royal Correspondence in the Hellenistic Period*, 1934, no. 9 — 以下 Welles, *RC* を略記) —

があり、マンティオロス一世の部族名も知られる (von Diest, *op. cit.*, S. 68 — ただし筆者未見) — マツヨから、ヌテムノスの記事とあわせて、ヒュサの建設をマンティオロス一世に帰し、先の碑文の二つ出来事があつてのことはなく、マンティオロス一世が行なわれたはずを説が出られた。M. Rostovtzeff, in *Cambridge Ancient History*, VII, 1925, p. 180; Welles, *RC*, p. 56. (ただし各前の由來に關するヌテムノスの記述は事実と反し、しかもこの項には他に混乱がみられるので — 前註④参照 — 不正確として容れられなう) マツヨが、*Asophraval* などの形容詞形、*Asophravalis* は、他の二つの刻文にもあらわれる。それらのうち、前述の刻文と同じ場所で発見された前二世紀の刻文については、説明の余地があるとしても (cf. Welles, *RC*, p. 261)、前三世紀の最後の四半世紀のものである (cf. W. Ruge, *Nysa*, *RE* XVII [1937], Sp. 1634, マササがマンティオロスモスによつてできたことは、おそらく事実であろう。しかし、その時期は前三世紀末以降とせねばならなう。ただアテュムブラについては、最初の刻文からもセリウロス一世あるいはアンティオロス一世の事績にながるものがあったと見えるようである。ヌテパノスの記事は、アテュムブラの成立がアンティオロス一世の力によるところ大であつたことを示している、とも解されよう。なお、ヌバルタとの關係は虚構にすぎなう。

⑧ Jones, *CERP*, p. 43, マテラとマンティオロスの Steph. Byz., s. v. *Ἀθούβρα* を参照せよ。

⑨ Str., XVI, 1, 23, p. 747; Plin., *NH* VI, 16, 42; Steph. Byz., s. v. *Antiocheia* (3); Plut., *Luk*, 32.

⑩ 二世紀初めの碑銘 (CIG, 6856) に *ἡ πόλις Ἰσχυρὴ Νεκρώου* とあることにより推定。チホリコヴァーはプリニウスの記事 (Phin. NH

VI, 30, 117) により、カトイキアとしてはアンティオコス¹の時代にちかぶるとする (Tschirikow, *Städtegründungen*, S. 30) が、誤りべし。この記事はむしろセレウコス一世の建設をうらうけるものである。cf. M. Rostovtzeff, *The Social and Economic History of the Hellenistic World*, I, 1941, p. 476 (以下 Rostovtzeff, SEHW と略記)。

⑪ 以下において、名前の変遷のみが手掛りとなる事例については、原

則として取りあげない。それらについては Jones, CERP, Tschirikow, *Städtegründungen* によって知ることができよう。

⑫ セレウコス朝の政策としてみた場合、アパメイアの条約による領土の縮小と国力の弱体化にともない、とくにアンティオコス四世によって、都市建設・植民政策は大きく変容すること、またこの条約によりタウロス山脈以西の小アジアがセレウコス朝の領土から切り離された結果、この地域については新しい歴史状況との関連において論ずる必要が生じること、がその理由である。このように限定することが不適切な事例もあるが、それらについては、そのつど配慮したい。

二

シリアは、セレウコス王国の核心をなし、それゆえに植民もまた集中的に行なわれた地方であった。とりわけ重視されたのは、いうまでもなく首都オロンテス河畔のアンティオケイア、軍事の中心オロンテス河畔のアパメイア、港市ピエリアのセレウケイアおよび「海に臨む」ラオディケイアであるが、これら四大都市も、その建設当初から、先住の土着人と無縁ではなかったようである。まずここから論を起すことにしよう。

アンティオケイアが建設される以前、その地にはすでに、ある程度ギリシア・マケドニア人が移住していたと考えられる。②しかし、移住があったにせよ、それらはごく小規模なものにすぎなかったらしい。いずれにしても、セレウコス一世以後に、この地は大きな変貌をとげることになる。ストラボンによると、アンティオケイアは拡大を重ねて四つの地区から構成されるにいたった。セレウコス一世の建設にかかるのは第一地区で、第二地区は「多数の住民の建設したもの」であり、第三地区はセレウコス二世、第四地区はアンティオコス四世による建設という。③問題は第二地区であるが、従来の研究はほとんど一様に、これをセレウコス一世が土着のシリア人を住ませた地域と推測する。これは、推測にすぎぬとは

いえ、この地区のみ建設者の名が伝えられていない奇妙さとあわせて、のちに多数のシリア人の存在が知られることを考えると、たしかにもっとも説明ししやすい解釈といわねばならないのであろう。これがあたって居るなら、建設当初、居住地区の区別がなされた点、注目すべき事実というる。

アンティオケイアについてはまた、ユダヤ人の存在が問題となる。ヨセフスの伝えるところによると、彼らはすでにセレウコス一世によって、市民権その他ギリシア・マケドニア人と同等の諸特権を認められたという。しかし、この伝承には疑問が多い。『ユダヤ古誌』、『アピオン論駁』にくらべて護教論的誇張が少なくといわれる『ユダヤ戦記』には、セレウコス一世に関する記事はなく、逆にアンティオコス三世以後ユダヤ人の居住が安定したと読める文章がある。その他の事実にも照らしても、シリアのギリシア都市においてユダヤ人がその役割を演ずるのは、だいたい前二〇〇年頃からのことであるらしい。しかも、市民としての諸特権を行使しようとするれば、それにもなって必然的に異教の神々の崇拜が要請されることになり、ユダヤ人がそれにしたがったとは考えがたいのである。ヨセフスの記事の信憑性については、否定的立場をとりたいと思う。

アパメイアの住民は軍事植民者からなっていた。マララスによれば、セレウコス一世はこの地にバルナケーという村(*Κολωνία*)を見出したといひ、またストラボンが「最初のマケドニア人たち」によって、かつてはペラと呼ばれたことを記しているから、土着の村に軍事植民地が建設され、のちに拡充されてアパメイアと名づけられたと考えられよう。

注目すべきは、アパメイアの領土の中に、ラリサ、カシアナ、メガラ、アポロニアなど、従属関係に立って貢税する多数のまちがあり、しかもそれらのまちが、おそらくはすべて、軍事植民者を受け入れた古い土着のまちであったと思われることである。このような従属関係は、史料のうえで前二世紀後半のできごとと関連してあらわれるのであって、その起源をいつに求めるべきかはさだかでない。しかし、アパメイアが王国最大の軍事基地であり、ここで多数の軍馬・戦象が調教

され、兵士の訓練が行なわれたことを思えば、その便宜上、広く周辺に存在するまちとの関係がはやくから成立していた、とみてよいではないか。上記のまちとの関係の、少なくとも一部は、前三世紀にさかのぼる可能性がつよいと考えたい。

セレウケイアに関し、ポリュビオスは前三世紀の末に市民が六千人であったと伝えている。^⑮ それらは建市にさいして近辺の都市・植民地から移住したと推察されるギリシア・マケドニア人の子孫であったに相違ないが、土着人との関係については、ほとんど知られない。ただストラボンに、ここが昔はヒュダトス・ポタモイと呼ばれていた、という説明がある。文字どおりには「水の河」だが、現地名の直訳なのであろう。^⑯

最後にラオディケイアであるが、史料はやはり僅少で、ステパノスの記事に、ここが以前はレウケー・アクター（白い海岸）、さらに以前はラミタと呼ばれたとあること、^⑰ マララスが、かつてあった村マザブダに言及していること、^⑱ をあげるととどまる。先住民がたどった運命については、窺い知るすべがない。

以上、シリアの四大都市について関連事実を通過した。セレウケイアとラオディケイアの場合、手掛りは微々たるものにはすぎなかったが、総じて次の諸点を指摘できるように思われる。

第一に、土着の住民とその住地が、ポリス内あるいはその領土内に組みこまれていったと考えうること。第二に、土着人以外の非ギリシア・マケドニア人が集団的に居住した場合についても、考慮にいれる必要があること。第三に、新建設にさいして、都市を中心とする地域の再編成が企図されたとみられること。以上のうち、第三の点については多少の付言を要する。これらの都市が王国の核心をなす地方の、しかもとりわけ中枢的な役割を果すべき都市であったことからすれば、セレウコス朝がその建設と拡充に大きな力をそそぎ、単なる拠点の設営にとどめなかったことそれ自体は、あまりにも当然のことにはすぎない。ちなみに四都市の名は、セレウコス朝の支配が消滅してのちも、土着名にとってかわられることなく生きつづけ、二つはアラビア人の地理学者の時代まで、他の二つは現在にいたるまで、ギリシア名で呼ばれている。^⑲ このことは再編成の徹底を示すものといえるであろう。しかしながら、土着の住地・住民および土着人以外の非ギリシア

・マケドニア人に関する諸事実が、そうした地域再編成の一環としてとらえられるべきものであるとすれば、それらは王国の中心地という特殊条件をぬきにしては語れないともいえる。その意味で次には、王国の中心から遠い地方に建てられた都市の例に、目をむけておかねばなるまい。

そのような例として、カリアのストラトニケイアをとりあげてみよう。^{②①}

ここでは、ギリシア・マケドニア人の移住が行なわれるとともに、近隣の諸村落が領土に指定されたらしい。ストラポンは次のように伝える。ストラトニケイアの領土には二つの神殿があるが、そのひとつゼウス・クリュサオレオス神殿は全カリア人の共有とされ、クリュサオリコン連合と呼ばれる連合を構成する村落の代表が、ここに集って供犠や彼らに共通する問題の審議票決を行なっていた。「ストラトニケイア人も、カリア人の生れではないが、クリュサオリコン連合の村落を所有していることから、連合に参加している」。

ところで、すこぶる興味深いことに、人名に付された区名として、カリア風の名前が多くの碑文にあらわれる^{②②}。それらは、カリア人の村落がストラトニケイアの領土に入れられてのち、そのままポリスの区を形成するにいたったことの証左に他ならぬであろう。そうとすれば、ここには独自のパターンがある。碑文はすべて前一世紀以降のものであるから、諸村落が都市創建当初から区として位置づけられたかどうかは、なお問題がある^{②③}とすべきかもしれない。ただ、前二三〇年頃のもの^{②④}とされるコス島における勝利者のリストに *Xpouaoupeúg átró Strarouneúg* の文字がみえ、当時ストラトニケイアがゼウス・クリュサオレオス神殿を中心とする村落連合に加わっていたことが確かめられるから、連合に属する村落を領土として所有したのは早い時期からのことであり、おそらくは創建時の決定によるとみられるのである。

しかしながら、この場合「領土として」所有する^{②⑤}とは何を意味したであろうか。ストラポンの説明によれば、村落連合は純宗教的な枠を越えた問題をも審議票決する。しかも都市の参加はストラトニケイアだけではない。早い例としては、前二〇二年頃の決議とされるデルポイ出土碑文がアラバンダの参加を示証している^{②⑥}。さらには *Xpouaoupeúg átró Straro-*

praefatus という表現。以上の事実にかんがみていえることは、ストラトニケイアが既存の自治組織を許容しつつ、自らまたそれに参加する方式を採用しているということではないか。万般の問題についてそうであったとはいえない。史料は伝わらないけれども、新しい支配の網が従前の体制のうえにかけられたことをも、考えておくべきかもしれない。しかし、よしそうであったとしても、カリア人に対等ともいえる地位を認める側面があったことの意味は、きわめて大きいといわねばならないであろう。そこには既存のものに適應していく姿勢が看取されるからである。

さて、この章において考察してきたところから、初期セレウコス朝の都市建設・植民において、非ギリシア・マケドニア人への対処のしかたが基本的な問題のひとつとして存在し、しかもそれが地域と状況のいかんにより相当変化していたという仮説が導かれよう。では、その変化の幅はどれほどのものであったろうか。この問いに答えることはむずかしい。しかし、ともかくその糸口を求めるとともに、さらに多くの具体的な事例が探索されねばならないであろう。非ギリシア・マケドニア人への対処のしかたは、その他の都市においてどのような相貌を呈しているか、いましばらく検討を続けていくことにする。

- ① Str. XVI, 2, 4, p. 749; App. Syr. 57 以下は、*Antiochia* の建設者であるが、*Antiochia* の建設者は、*Antiochia* の建設者である。E. Homigmann, 'Syria', *RE* 2, Reihe IVa, [1893], Sp. 1611.
- ② G. Downey, *A History of Antioch in Syria, from Seleucus to the Arab Conquest*, 1961, pp. 49~53.
- ③ Str. XVI, 2, 4, p. 750. *Antiochia* の第三地区は、*Antiochia* の建設者であるが、*Antiochia* の建設者である。E. Homigmann, 'Syria', *RE* 2, Reihe IVa, [1893], Sp. 1611.
- ④ Downey, *op. cit.*, pp. 78~80; Jones, *CERP*, pp. 242~43; Tarn, *HC*, p. 158. 第一地区の住民がギリシア・マケドニア人であることは、*Antiochia* の建設者である。E. Homigmann, 'Syria', *RE* 2, Reihe IVa, [1893], Sp. 1611.
- ⑤ I. Benzinger, 'Antiochia (1)', *RE* I [1893], Sp. 2443 以下。この移住者は、第二地区に在るものとするが、これも単なる推測にすぎない。
- ⑥ Joseph. *Ant.* XII, 3, 1 § 119~24; *cont. Apion*, II, 4 § 39.
- ⑦ Joseph. *Bell.* VII, 3, 3 § 43~45. *Antiochia* の建設者である。

とらわされてゐるのは、文脈上「トントキオス三世」(R. Marcus, *Josephus VIII* [Loeb Class. Lib.] 1943, p. 739) によつて「トントキオス四世」(V. Tschirikover, *Hellenistic Civilization and the Jews*, 1966, p. 289——以下「Tschirikover, *Hell. Civ. Jews*.」略記——) によつてであるが、前者がより可能性が高ことである。トントキオス一世の略記 (H. St. J. Thackeray, *Josephus III* [Loeb Class. Lib.] 1927, p. 517 note C) には明確である。

⑧ R. Marcus, *op. cit.*, Appendix C; Tschirikover, *Hell. Civ. Jews*, p. 328.

⑨ 諸権利はよもかく、ヘブライ人の存在そのものは認めようとする語である。(Downey, *op. cit.*, pp. 79~80) 「根拠に乏しい」。

⑩ Malalas, p. 203, ed. Bonn. 449より「強固に類似するヤマ系の名前」の語に注意。Tschirikover, *Städtegründungen*, S. 62.

⑪ Str., XVI, 2, 10, p. 752.

⑫ チュロロヴァーは、「はやくヘレノウロス以前に、この地にはおそらく「イケドニア」人の植民地があった」としてストラボンをひき (Tschirikover, *Städtegründungen*, S. 61) 「ギリフィス」は、「最初のイケドニア人たち」はアンティオキオスのイケドニア人である可能性の方がより高いと推定してゐる (G. T. Griffith, *The Mercenaries of the Hellenistic World*, 1935, p. 150) 「シモアン」は「キエネロス」であると前二八五年に「シモ」がイラと呼ばれてゐるようである (Diod., XXI, 20) 「キエ」とすれば軍事植民地の建設者は「ヘレノウロス一世」であると推定される。それはアンティオキオスの記事 (App., Syr. 57) によつてである。また「シモ」は「シモ」 (Jones, *CERP*, p. 451 note 23) 、「シモ」を「シモ」に考へた。

⑬ Str., XVI, 2, 10, p. 752; Diod., XXXIII, 4a.

⑭ Jones, *CERP*, pp. 243 and 452 note 23. 例を「マリヤ」にうつす。

「ステパノスはギリヤ人がシザラと呼んだといふ」(Steph. Byz., s. v. *Aldraia* (5)) 「これは「アール」文書にあらわれる「シムキール」である。シムキールは明らかに土着名である」。

⑮ Polyb., V, 61. ヤマは全人口を三万人と推定する。Beloch, *op. cit.*, S. 255 Anm. 2.

⑯ 「シムキール」からの移住が考えられてゐるが、ヘロニヒン (Diod., XX, 47, 6) の「真実が含まれてゐる」といふ「トントキオス」の移住が「たゞ」であることが可能である。Jones, *CERP*, p. 243; Homigmann, 'Seleukeia (2)', *RE* 2, Reihe II A₁ [1921], Sp. 1185~86.

⑰ Tschirikover, *Städtegründungen*, S. 60.

⑱ Steph. Byz., s. v. *Araobizeta*.

⑲ Malalas, p. 203 ed. Bonn.

⑳ Jones, *CERP*, pp. 242 and 451 note 23.

㉑ ステパノスによれば「アンティオキオス一世が建設し、妃の名をとつて命名したといふ」(Steph. Byz., s. v. *Paroufkeia*)。他方「アンティオキオスがヘレノウロス一世の建設にかかるとしてあげてゐる都市」のなかに「ストラトニキア」の名があり、「これはカリアのストラトニキア」であると推定する (App., Syr. 57)。「しかし、ルーヤも「シムキール」の戦い以後のことである。それに先立つ前二九四年頃、彼は「ストラトニケ」を離別して、息子アンティオキオス (一世) に与えてゐる」から「ステパノスの説明が妥当である」(W. Ruge, 'Stratonikeia', *RE* 2, Reihe IV A₁ [1931], Sp. 322. ただし「ロキエ」は「トントキオス二世」の「建設者の可能性がある」といふ)。Beloch, *op. cit.*, S. 259. 確実なことがないわけだが、本稿によつて、初期ヘレノウロス朝の建設とみておけば充分である。

- ② *Karavia Makedonou* (Str., XIV, 2, 25, p. 660), *πάρις Makedonou* (Steph. Byz., loc. cit.) and Democracy in Hellenistic Federalism, *Class. Philol.* XL (1945), p. 78 esp. notes 73 and 74 (24-25)
- ③ Str., loc. cit.
- ④ C. Diehl et G. Cousin, *Inscriptions de Lagina, BCH XI* [1887], p. 33.
- ⑤ Th. Klep, *Zur Geschichte des gymnischen Algone an griechischen Festen*, 1918, S. 6 (筆者未見) J. A. O. Larsen, *Representation* and *Démographie et d'histoire grecques*, III, 1942, p. 157.

三

初期セレウコス朝の植民政策において、主流となったのは都市の建設ではなく、軍事植民地の設置であったと思われる。①ギリシア人の意識からすれば、住むべきはなによりもポリスでなければならなかったが、都市建設が大変な事業であることと、広域の安定がまず望まれたことは、その実現をむずかしくした。かくて、安定発展のあかつきにはポリスに昇格することを前提しつつ、多くの軍事植民地が建設される。そしてこうした軍事植民地もまた、しばしば既存のまちや村落を利用したらしい。その一例として、テュアテイラをあげることができよう。

テュアテイラはリュディアのカトイキアである。ペルガモンやサルディス、あるいはマグネシア、スミュルナをつなぐ道路の結節点として重要な位置を占め、その名前からも歴史の古さは知られるが、②セレウコス朝としても早くから入植を開始していた。④

このテュアテイラに関して、次のような語句を記した碑文断片がある。「王セレウコスに。テュアテイラにいるマケドニア人の指揮官たちおよび兵士たちは」^⑤ *Baviles Ξεσηκού* [τῶν ἐν Θυατείροις Μακεδόνων ἢ φίλωνός καὶ ἰσπανίων] *ἐπιπέδοι* ^⑥ *καὶ τῶν ἐπιπέδοι* *Μακεδόνων*

「ここでマケドニア人が、「しにいる」あるいは「し近傍の」という前置詞をとまなう形で記されている点に注意したい。^⑦それはマケドニア人が他の住民と区別されていることを示唆するようである。もちろん厳密にいえば、ここでの区別とは、碑文の内容をなす決議を行なった主体がマケドニア人であって他の住民ではない、という意味にすぎない。それがどこまで身分権利や居住地区の区別をふまえたものであったか、憶測は控えるべきであろう。ただ、軍事植民地建設の早い段階で、ギリシア・マケドニア人が土着人と自分たちを区別したひとつの例がここにあるということを確認して、次の事例の検討に移りたい。

シビュロス山近くのマグネシアは、名前から受ける印象と相違してギリシア都市ではなく、ギリシア・マケドニア人の植民者および駐屯軍が住まう、機構の未発達なまちであった。^⑧前二四三年頃、このマグネシアとリュディアの有力都市スミュルナとの間に、シュンポリテイアの条約が結ばれたことを伝える碑文がある。^⑩この条約によりスミュルナの市民権を得たマグネシアの住民は、碑文によれば次のようであった。

- (一) マグネシアにいるカトイコイ^⑪
- (二) 野営する兵士^⑫
- (三) その他のマグネシア住民^⑬

はじめの二つのグループが軍役にたずさわる人々をさし、最後のグループが軍事に関与しない住民をさしていることは疑いない。

さて、これらのうち最後のグループに「自由人にしてギリシア人であるかぎりの」 *δῶροι αὐθόροι [ε]λευθέρων τε καὶ ἑλευθέρων*^⑭ という限定が付されていることは、はなはだ重要であるといわねばならない。マグネシアには、この条件に該当しない住民がいるのであり、それらの住民はあきらかに劣格の存在なのである。ここで民族による区別がもちだされていることは特記に値しよう。

ところでスミュルナは、同じ機会に、マグネシアの近くにあるパライマグネシアという要塞の住民にも市民権を与え、クレイロスの所有を保証した^⑩。このパライマグネシアの兵士たちのなかには、「オーマネス麾下のペルシア人」^⑪がいて、さきのことと矛盾するようにも思える。しかし、この点については、この条約が特殊な状況のもとで締結されたことから、説明できるようである。

前二四六年に始まった第三次シリア戦争は、この条約が結ばれた時点でなお終結していない。碑文に述べられているように、セレウコス朝への忠誠を始終堅持したスミュルナが、マグネシアをセレウコス朝陣営につなぎとめようとしたところから、この条約は起案された^⑫。おそらく、マグネシアの兵士たちが、すでに離反していたか、あるいは多かれ少なかれ不穏の気配を示していたという事情が、その背景にあつたのであろう^⑬。事実、マグネシア住民の主導権が兵士たちによって握られていたことを、われわれは碑文の文面から窺うことができる。すなわち、スミュルナ側の申し出に応じてマグネシア側から派遣された使節団は、カトイコイから二名、野営する兵士たちから二名、計四名によって構成され、さきあげた第三のグループからは選出されていないのである^⑭。兵士たちの動静こそは、スミュルナがなによりも懸念してやまぬところであり、パライマグネシアのペルシア人に対する措置は、そのような配慮からなされたものと考えられる。状況如何によつては、このような措置も生じたことを、われわれは銘記すべきであろう。しかし、そのことは同時に、状況が許しさえすれば民族による区別をもちだすことと、いわば表裏の關係にあつた。マグネシアにおいては、移住してきたギリシア・マケドニア人と土着の住民との間に、すでに一定の区別が行なわれていたであろう。そして、それはそれで維持されるべきものとされたのである。市民権賦与にさいして付された条件は、状況によつてたちどころに変化するギリシア・マケドニア人側の姿勢を、はしなくも示証しているといわねばならない。

マグネシアにおける非ギリシア・マケドニア人の身分がどのようなものであつたかは、よくわかっていない^⑮。この点については、マグネシアに近いサルデイスの場合が、参照すべきものを持っている。

サルデイスは、いうまでもなく、かつてのリュディア王国の首都であり、王国倒壊後はペルシア帝国の小アジア支配の中心として、重きをなした都市である。アレクサンドロスが進軍してきたとき、この都市はいちはやく降服し、リュディア人の法の維持を許された^②。しかし当時、都市としての行政組織は整っていなかったらしい^③。セレウコス朝の治下に入つてのち、小アジア統治の核として文書局が置かれる一方、都市の機構整備も進められ、前三世紀の中頃には、すでにギリシア都市の形をなしていたようである^④。

ところでロベールは、その詳細な小アジアの人名研究のなかで、次のことを指摘している。前四世紀の終り頃、条約締結のためミレトスに赴いた使節の名は、すべて土着名であった。しかるにローマ帝国時代の初期になると、若干土着名のなごりが認められるのみで、固有名詞はほとんどすべてギリシア名である。この変化は前三世紀の間に生じたものと考えられる、と^⑤。この事實は、土着人層のギリシア化が進んだことを示しており、ナシヨナリスティックな全体的対立関係の存在を否定するものと解されよう。

しかし、サルデイスの土着人全体を、ひとしなみに論ずることはできない。彼らの階層・身分関係について、一条の光をあててくれる碑文がある。サルデイスのアルテミス神殿の内壁で発見されたこの碑文は、^⑥ムネシマコスという人物の資産を対象として、彼と神殿との間に結ばれた契約、およびこの契約をめぐるその後に取り計らわれた措置に関する記載を内容とする。この契約自体については、なお検討すべき問題があるけれども、^⑦いまはさておき、碑文の第一欄にあげられた諸物件が、神殿あるいは個人の資産として、われわれが考察している時代のサルデイスに存在したということのみをふまえ、次の点を指摘しておきたいと思う。

(一) 資産には村落 (*kōmion*)、クレエロス、宅地 (*oikonedra*) などが含まれ、農民 (*kaot*)、奴隷 (*oikētai*) が労働していた。

(二) 彼らは、土地とともに、抵当に入れられた(あるいは売渡された)。

(三) 二つのクレイロスに属する六名の奴隸^③の名前があげられているが、それらは付記された父親、祖父の名前とともに、彼らが土着のリュディア人であったことを推測させる^④。

このような農民、奴隸にとっては、サルディスを支配するものがリュディア人であれギリシア・マケドニア人であれ、被支配者として労働することに変わりはない^⑤のである。

では、土着人の上層階級とギリシア・マケドニア人の関係はどのようであったか。さきにみた人名の変化は、サルディスにおける土着人のギリシア化を、いかほどか物語るものであった。しかし、サルディスの行政は、どのようにして行なわれ、土着人はどのような形でそれに参与することができたのか。土着人の一部が「市民」になったことも考えられぬではない^⑥。が、「ポリス」なるものの実体は、土着人とは別のところに存在し、そうした前提に立って、土着人と上層階級との接近がなされた可能性も、否定しざることはできないであろう。この点は、なお不明とせざるをえないのである。

① Tarn, *HC*, p. 145.

② *karouera Makedonou* (Str., XIII, 4, 4, p. 625) κτανονοςはリントントス (Steph. Byz., s. v. *Boutrera*) 以下本文に於ける碑文の表現から、少なくとも当初は、カトイキヤとしてスタートしたと考えられる。前二〇一年、ユリッホス五世を頌徳したものに推定される刻文断片 (*BCH* XI [1897], p. 104 no. 25 = *JHS* XXXVII [1917], p. 110 no. 23) は、「評議會オホロ民会」の各におきて建てられたものから、その中にはポリスの機構を備えられたものと思われる。ただし、どこまで完全なポリスになったかは問題である。

③ その接尾辞は、他の地名にも類例があるが、リトニョム語で「要路」を意味したところ。S. Reinach, *REG* III [1890], p. 64; J. Keil und A. von Premerstein, Bericht über eine dritte Reise in Lydien und angrenzenden Gebieten Ioniens ausgeführt 1911, *Denkschriften der Kais. Akademie der Wissenschaften in Wien*,

Philosophisch-historische Klasse, Bd. LVII, Abh. I, 1914, S. 87. *Πολιτικὸν τῆς πόλεως* なることばは *Πολιτικὸν τῆς πόλεως* (*Plin.*, *NH* V, 31, 115) κτανονοςとすれば、その語のロイヤムであるが、*Plin.* の *κτανονος* とは (Steph. Byz., loc. cit.)。また一碑文断片 (*Cl. Rev.* III [1889], p. 136 no. 2) には *Δεφταρῆς, Ηλεκάντα, Βουτρερά* の文字が読まれ、これを問題にするものがある^⑦。しかし、これらの手摺の *Πολιτικὸν* の古名を論じておはすかきしごよら *Magie*, *Roman Rule in Asia Minor, to the End of the Third Century after Christ*, II, 1950, p. 977.

④ 建設者として、*Κατασκευαστῆς* の通説である。A. Schulten, Die makedonischen Militärkolonien, *Hermes* XXXII [1897], S. 528; Tschirikower, *Städtegründungen*, S. 22; Jones, *CERP*, p. 44; *Magie, op. cit.*, II, p. 977. κτανονοςは *Κατασκευαστῆς* の建設を記す一碑文断片 (本文後出) に「*Κατασκευαστῆς*」と

① 第一のグループが、いわゆる軍事植民者であるかどうかは確言できな²。cf. Bikerman, *op. cit.*, pp. 100~05; M. Launey, *Recherches sur les armées hellénistiques*, II, 1950, p. 671.

② OGI, 229, l. 45, cf. l. 74.

③ この二つに照らして考えみると、ききに検討したテュマテイヤの二つの断片に記されたマケドニア人を、従来なされてきたように一括して扱うことには、疑問の余地があるかもしれない。メラニマシネシアはその名前から、また碑文により「かろうマシネシアに似たカトイロト」(I, 100)と云うことが知られる点から、マシネシアと縁接からゆ関係がもたらされる。しかし「スコッセルナとの交渉はマシネシアとは別個になおれるのである。」「テュマテイヤ近傍の「マシネシア人」は「メラニマシネシアの住民に對比されるかもしれない。詳しい事情は、テュマテイヤについてマシネシアについてからなら、それ以上の推測は不可能であるが、移住のメターンが多様であることは考慮される必要はない。」

④ OGI, 229, l. 105.

⑤ *Ibid.*, II, 12~18 et 98~97. 王の意向を定むるのメターンが、

K. T. M. Atkinson, *The Seleucids and the Greek Cities of Western Asia Minor, Antioch*, II [1968], p. 51.

⑥ Launey, *op. cit.*, II, p. 671; Schmitt, *op. cit.*, S. 172.

⑦ OGI, 229, II, 18~22.

⑧ スウエント、シカヤは「その第三のグループに付された条件から、非ギリシヤ人でも自由人であることはできたと考えられる。H. C. Oenunka, *K ponopy o nokokemni Zaeo b uapcrne cecakrur*, *BZH*, 1971, No. 1, crp. 15. こが「この条件が述べた内容を述べて書かれたもので、疑問が残る。」

⑨ *Art. Arch.* I, 17, 3~8 (esp. 4) cf. *Diod.*, XVII, 21, 7. ノ

メノスによれば自由であることを認められたというが、貢税を課せられ軍隊も駐屯したところのようであるから、自由と自治に制限のあったメノスもあつた。Magie, *op. cit.*, I, p. 121.

⑩ メリポノスにちなむ「メリサンドロスに降服を申し出たのは「サルティエスのアトロポリスの指揮官」メリトリスとサルティエスの有力者だ」とであった。Art. *Arch.* I, 17, 3. また「前四世紀のメリトリスとの通商条約」(Syll. 3 273) により、メリトリスではメリタネイアがサルティエス商人を保護するのに対し、サルティエスのメリトリス人は「サルティエス人が彼ら自身をもちか任せざるべし」の保護を受た」ともいふ。cf. Jones, *CELP*, p. 38; Magie, *op. cit.*, II, p. 97b note 5. 条約の年代については Schmitt, *op. cit.*, SS. 18~19.

⑪ W. L. Westermann, *Land Registers of Western Asia under the Seleucids, Class. Philol.*, XVII [1921], p. 19.

⑫ Magie, *op. cit.*, I, p. 133.

⑬ L. Robert, *Noms indigènes dans l'Asie-Mineure gréco-romaine, Ière partie*, 1963, p. 82. (以下 Robert, *Noms*, 上記同)。「このメシネシア人のメシネシアと同様であること。」

⑭ W. H. Buckler and D. M. Robinson, *Greek Inscriptions from Sardis I, AJA XVI* [1912], pp. 12~14. 6. 以下著者著 *Sardis*, VII, 1932 12 No. 1 上記同。

⑮ K. T. M. Atkinson, *A Hellenistic Land-Conveyance: The Estate of Mnesinachus in the Plain of Sardis, Historia XXI* [1972], pp. 45~74. 44. の契約の性格「年代などについて新説を提出している。メノトネイアが土地をめぐり「誰から与えられたのか」という問題は「小稿にわたって看過できなるといふのである。やも無理な立論のちやうと思われるが、しかし断定的に結論を出すことは不可能な問題である」といふ。詳しく検討は別の機会に譲り、こがは立入らな

い。

② Ibid. pp. 49~50 and 62~68.

③ おそらく所領の管理を委ねられた特別身分の奴隷であろう。Buckler and Robinson, op. cit., pp. 58~59; Atkinson, op. cit., pp. 70~71.

④ アトキンソンは、これらの名前を奴隷の *legal masters* と解するが (Ibid., pp. 48, 63~64 and 71)、そうであるなら、所領の分割 (*Outfers*) に関して、ピュテオスとアドラストスの二人だけがあげられているのはなぜであろうか。また、名前のみにもとづいて、アドラストスを非自由人の生れであろうとし、他をサルデイスに移住した退役兵であろうとみるのも、いささか恣意的にすぎる。従来の説をとりた。

四

次にはメソポタミアのエデッサ(カリロエ湖畔のアンティオケイア)をとりあげてみよう。この都市について、「半バルバロイの」というエピセットが知られている。①このことから、ギリシア・マケドニア人と土着人の間に融和的な側面のあったことが指摘できるかもしれない。

ただ、エピセットに真実が含まれているとみなすにしても、現実に移して何を讀みとるべきかは問題であろう。エデッサのギリシア化は、表層的なものにすぎなかったらしい。②前二世紀の後半、メソポタミアがパルティアの勢力下に入った混乱期に、エデッサではいち早く土着の王朝が成立している。③前三世紀のエデッサについて、得られる知見は無に等しいけれども、さきのエピセットは、ギリシア・マケドニア人と土着人が土地を同じくして住んだこと、あるいはせいぜい、なんらかの連携の試みがなされたことを含意するもの、という程度に解しておくのが無難なところであろう。

③ 名前の検討については Buckler and Robinson, op. cit., pp. 28~

41. アトキンソンの指摘 (Atkinson, op. cit., p. 65 note 8) の人物がリュディア人である可能性を否定するものではないと思われる。cf. Robert, *Noms.*, p. 320. まさうん人名から出身地を考えることには限界があり、その点なお留保的であらねばならない。

④ 彼らの身分条件を、史料にそくして、より具体的に解明すること、とくに「王の農民」と比較して、彼らの身分がどのようであったかを吟味すること、これらについては別稿を期した。

⑤ ターンは、サルデイスがポリスに移行した結果、多数のリュディア人が「市民」になっただけであろう。Tam, *HC.*, pp. 156~57. しかし、そういってよいかどうか。そうでない可能性もまた、考えられるように思う。

居住地域としての都市の構造は、どのようであったろうか。すでにみたように、オロンテス河畔のアンティオケイアとカリアのストラトニケイアの例は、この点に示唆するところがあった。この関連においては、プリュギアのアパメイアの場合同様に値する。

このアパメイアは、アンティオコス一世が近くにあった都市ケライナイの住民を移して建設したといわれる^④。ケライナイは、交通の要衝であるとともに自然にもめぐまれ、ペルシア王が城砦を築き離宮を営むなどしたほか、商業でも繁栄した有力な都市であった^⑤。アレクサンドロスの軍門に降つてのちはプリュギアの首都とされ、さらにアンティゴノス・モノパタルモスは、アンティゴネイアを建設するまで、ここに本拠を構えている^⑥。

さて、このアパメイアの建設をめぐる、ジョウンズは次のような指摘をした。アパメイアは、前二世紀の初めにはギリシア都市の制度を備えるにいたっているが、ギリシア人の移住に関する伝承は存在せず、しかも住民は後の時代、部族にわけられず街路あるいは職種によって組織されている。かくて彼はいう。「アパメイアにおいて、土着のまちを自治体として再編成する新しい型の建設の最初の例がある、ということかもしれない^⑦」。

ギリシア・マケドニア人の移住についての史料は、彼のいうように遺存しない。しかし、そのことはアパメイアが土着人のみでスタートしたことを意味しないであろう。とくにアレクサンドロスの遠征以後、ケライナイには多数のギリシア・マケドニア人が住むようになっていた、とみるのが事実に近いと思われる^⑧。

だが、われわれの関心をひくのは、むしろ指摘の後半である。彼が土着のまちの再編成を推測する根拠は、ローマ時代の評議会および民会の決議において、彫像の建立費用を負担する人々の所属が、街路あるいは職種によって示されていることにある^⑨。これをどのように考えるべきであろうか。たしかに、ここには一種の地区による組織が認められる。時代的な隔りがあまりにも大きいので、安易な推測は慎しまねばならない。しかし、地区の区分にもとづいていることは、その起源が存外古いものであるとの想定を促すに足る。早くから、ピュレー制にこだわらぬユニークな方式が採用されていた

かもしれないのである。アバメイアの例は、あくまで参考例にとどめねばならないであろう。ただ、如上の仮説が、一概に棄却できないことを銘記しておきたいと思う。

いまひとつ考察すべきは、ティグリス河畔のセレウケイアの場合である。王国の最初期にセレウコス一世が首都として建設したこのセレウケイアは、のちに首都の座をオロンテス河畔のアンティオケイアに譲ったけれども、もつとも重要な都市のひとつとして、ながく繁栄した。

この都市の建設にさいして、バビロンの住民が移住させられたことを、パウサニアスが伝えている。またセレウケイアは、古くからその名を知られた都市オピスの地に建てられたと通説的に考えられており、その住民も、相当数が包含されることになったと思われる。かくてセレウケイアには、多数のバビロニア人が居住していたということができよう。ストラボンによれば、セレウケイア人はバビロニア人と呼びならわされていたという。これは、ひとつにはセレウケイアにおけるバビロニア人の数が多さによっている、と考えられるかもしれない。

さて、ギリシア・マケドニア人とバビロニア人が、初期のセレウケイアにおいて、どのような関係にあったか、直接の手掛りは欠けている。しかし、推測の糸口を求めると、前一八九年、コンスルのグナエウス・マンリウスが行なった訓示のうち、次の一節が注目されよう。「エジプトのアレクサンドリアを、セレウキアやバビロニアを、そしてその他世界中に散在する植民地をもつマケドニア人たちは、シリア人、バルティア人、エジプト人になりさがってしまった^⑮。これは、ガラテア人との戦闘を前にして兵士を鼓舞すべく、ガラテア人が恐るに足らぬ理由として、土地と気候が変れば本性の維持が困難になることをあげ、そうした例として語られた言葉であるから、かなり割引いてきく必要がある。にもかかわらず、そこに何らの真実も認められないとすることは躊躇される。ローマ軍の兵士たちに、そうしたことに關する知識がどこまであったかは疑しいが、マンリウスにしてみれば、やはりいくらかの理由なくしては、口に出せない言葉ではなかったかと思われるからである。この点について、もう少し追跡できないであろうか。

時代的には離れるが、紀元後一世紀前半のセレウケイアに関するヨセフスの記事がある。それによると、セレウケイアの住民は多数のマケドニア人とギリシア人、そしてそれに劣らぬシリア人から構成されており、シリア人はポリテウマを形づくっていた。「セレウケイアではギリシア人が広汎にわたってシリア人と対立し、争いと不和のうちに生活しているが、優勢なのはギリシア人である」^{①⑦}。ここにいうシリア人とは、文字どおりの意味ではなく、むしろバビロニア人を中心とする非ギリシア・マケドニア人と解されようが、この時代になると、彼らとギリシア・マケドニア人の関係は、建設当初にくらべれば、よほど変化していただであろう。ヨセフスの記事にみられる対立関係は、同じく一世紀前半のセレウケイアについてタキトゥスが、「市民から、財力と識見に応じて選ばれた三〇〇人が、一種の元老院を形成し、民衆自体にも、固有の権力が存在していた」^{①⑧}と記していることと、ペアさせて考えるべきものと思われる。しかしともかく、この時代にいたってなお、民族の差異に根ざす対立があったこと、ポリテウマが存在していることの二点は、見逃すことのできない事実といわねばならない。

このことから、ひとつの推定が許されはしまいか。ギリシア・マケドニア人と非ギリシア・マケドニア人は、おそらくは建設当初から、基本的に別個の社会集団を形成することによって共存していた、と。初期における支配・被支配の関係は、時をへて変質せざるをえなかったけれども、社会集団としての居住地、組織については、同じ礎石が受けつがれたと考えるのである。

ちなみに、前三世紀の末、同じバビロニアのウルクにおいて、アヌ・ウバリットなる人物が都市の統治者として史料にあらわれるが、彼はおそらく、移住したギリシア・マケドニア人と土着人の関係に支障が生れぬよう配慮したセレウコス朝が、支配の協力を求めるべく、ギリシア・マケドニア人の統治者とは別に任用した人物であったと推測される^{①⑨}。このことは、別個の社会集団を前提とした統治の手段とみると、より理解しやすいものとなるろう。

そうであったとすれば、ギリシア・マケドニア人にとってもバビロニア人にとっても、おのおのの集団にあるかぎり、

その個性はむしろ維持しやすい条件下におかれていたといわねばならない。しかも集団の力が前提されているだけに、ギリシア・マケドニア人も放恣に振舞うことは許されず、非ギリシア・マケドニア人の自由な活動を相当程度認容せざるをえなかった。このような共存の姿を考えれば、第三者の目に純ギリシア・ポリスと映らなかったとしてもあやしむにたらず、さきのマンリウスの言葉もうなずけるように思われるのである。

ギリシア・マケドニア人にとって、植民さが古い伝統のある固有の体制をもつ都市であるほど、土着人への対応は困難の度を増した。バビロニアは、その典型的な例のひとつといつてよい。^②さらに、統治のおよびにくい僻遠の地方ともなれば、時として悲惨な事態をも惹起する。アンティオコス三世が、ヒュルカニアのシュリンクスというまちに遠征軍を進めたとき、急を知った土着人は、在任ギリシア人を全員殺戮し、その財産を奪って逃走したという。^③

セレウコス朝にとって、都市建設と植民は真に容易ならざる問題であった。その場合、王国の中心を離れるほど、とくに東へいくほどに、ギリシア・マケドニア人の立場が弱いものにならざるをえなかったことは、いうまでもあるまい。しかし、程度の差はあれ、各地には各様の問題があり、全体的にみても、セレウコス朝が自由にことを進められた場合は、むしろ少なかった。これまでに吟味した諸事例は、そのことを物語っているように思われる。

- ① *Ἀρτίκυρα ἢ μέγιστος βασις*: Malinus, p. 418 ed. Bonn. キノソス一世が、はじめはこう呼んでたが、のちにエピマッサと名を改めたなどという。この説明は、名前の変遷に関しては誤っていると考えられる。Jones, *CERP*, p. 216. しかし、エピマッサがこのエピガンタをセレウコス朝支配期のものである点に注意した。Tam, *GBI*, p. 15 note 4. ^② *Ed. Meyer*, 'Edessa (2)', *RE* V [1905], Sp. 1936.
- ② Cf. Jones, *CERP*, pp. 219~20; C. Schneider, *Kulturgeschichte des Hellenismus*, I, 1967, s. 764.
- ③ Str., XII, 8, 15, p. 578.
- ④ Cf. Xen., *Anab.* I, 2, 7 f.; Herodot., VII, 26 f.; *Hellenica Oxyrhynchita*, VII, 3.
- ⑤ *Plutarch* — *Arr.*, *Anab.* I, 29, 1~3; Curt. Ruf., III, 1, 6~8. *Plutarch* — *Diod.* XVIII, 52, 1; XIX, 69, 2; 93, 4; *Plut.*, *Demetr.* 6.
- ⑥ Jones, *Greek City*, p. 15. 前二世紀初めの状況については、キヌソス二世時代の評議院決議文 (*IHS* LV [1985], p. 72. cf. *REG* LII [1939], p. 508 f.) を参照。

- ⑧ たたじろスエナムンヤンのヤンビ「ヤンナムクの時代」(1921)……(4) 4
 のキリシヤ(教団)の組織を述べた」(Rostovtzeff, *SEHHW*,
 I, p. 477)とあるのが、あたかもこのおかしな「わかちなご」キリ
 シヤ世界との交流にすぎない、前四世紀のキリシヤに客死したキリ
 シヤ人の名がキリシヤ名であることに注意した。Robert, *Noms*, p.
 350.
- ⑨ *oi ēv tēi Oephatiq̄ Hlarceliq̄* (od. *oi ēni tēiq̄s Oephatas Hlarceli-*
ns) ēpōrtotē q̄s tōs oi ēv tēi Skortēq̄ Hlarceliq̄ exvērta; *IGR*,
 IV, 788~791.
- ⑩ App. *Syr*, 57~58; Str. XVI, 1, 5, p. 738; Paus. I, 16, 3;
 Plin., *NH* VI, 30, 122; Tac., *Ann*, VI, 42; *Ann*, Marc., XXIII,
 6, 23.
- ⑪ Paus., loc. cit.
- ⑫ 奥初ミヨの語を提示したのには H. Winkler, *Altorient. Forsch.*, II,
 Reihe, III (1900), S. 508 ff. (筆者未見) とあるが、以後支持者が著
 大した。E. R. Bevan, *The House of Seleucus*, I, 1902, p. 254 note
 2; Streck, 'Seleukeia (I)', *RE* 2, Reihe II A₁ (1921), Spp. 1151
 ~54; B. Meißner, *Zu Strabo XVI, 1, 9, Klio* XIX (1925), S.
 103; Tschirikover, *Städtegrundungen*, SS. 90~91; Rostovtzeff,
SEHHW, I, p. 479; *Tam, GBl*, p. 61. たたじろ ヤンナムクがキ
 リシヤの改称であることは、ヤンナムクの建設後、
 ヤンナムクは一個の村 (40/47; Str. XVI, 1, 9, p. 739) となり、取引の
 中心地の役割を果たしたとされる。
- ⑬ Str. XVI, 1, 16, p. 743.
- ⑭ たたじろ 単に「この都市をキリシヤに改めたから」だと解しては
 ならない。cf. *Tam, HG*, p. 158.
- ⑮ Liv., XXXVIII, 17, 11.
- ⑯ 例えば、インリヌスと同じような例として、インシリアの場合をあや
 づめるのだが、同年、ロドスの使節は、インシリアの住民が言語、習
 慣、法律などを純粋に保持している」と述べている。Liv., XXXVII,
 54, 22. たたじろキリシヤは「創立者ヤンウ
 スの精神を忠実に保持して、野蛮な習俗の中に堕したことは一度もな
 った」ように、Tac., *Ann*, VI, 42. (訳文は国原吉之助『説』『タキ
 ラマク』世界古典文学全集第2巻 筑摩書房、昭和四〇年、一六四頁の
 脚注を拝借した。)
- ⑰ Joseph, *Ant*, XVIII, 9, 8~9 § 372~74, *ēprolētrēvōdērov* の語
 義については *Tam, HG*, p. 157 note 3.
- ⑱ Streck, op. cit., Sp. 1161; Tschirikover, *Heil. Civ. Jews*, p.
 290. ターンは文字通り解して「商業に従事するギリヤ人とキリシヤ
 キリシヤ人は城壁外に住んだと考えられるようである。Tarn, *GBl*,
 pp. 10 and 61. そのような居住の区別が明確に示されていることは、
 それ自体興味深い問題であるが、やや杓子定木な解釈のようには思え
 ない。したがって、これについては、以上の結論を知った支障とはならな
 くない。
- ⑲ Tac., *Ann*, VI, 42. 国原訳、一六四頁。
- ⑳ Tarn, *GBl*, pp. 25~26.
- ㉑ たたじろ、キリシヤの事情にすぎない問題は多い。もしあたり、拙稿
 『ヤンウロス朝の支配とオリエンタル人』『西洋史学』79、昭和四三年、
 五三~五四頁を参照された。
- ㉒ Polyb., X, 31, 6~11.

ところで、すでにいくつかの例をみたように、都市・軍事植民地においては、しばしば土着先住民以外の非ギリシア・マケドニア人がいたらしい。これまでにとりあげた例のほか、都市についてはピシディアとの境界に近いブリュギアのアポロニア^①、ピシディアのネアポリス^②、アンティオケイア^③、マルギアナのアンティオケイア^④、軍事植民地との関連ではリュディアのヒュルカニス^⑤、ミュソマケドネス^⑥、ミュシアのマケドネス・アストラカエが^⑦、さまざまな議論の対象となっている。いずれも問題が多く、しかも知られるのは名前のみで、具体的にその実態を追求できるだけの素材とはなりえない。しかし、それらは、われわれの課題がより複雑なものとなるべきことを示している。われわれが語りうることは僅かなのである。

都市建設・植民と、そこに要請される非ギリシア・マケドニア人への対応。セレウコス一世からアンティオコス三世にいたる時代について、管見に入った事例は以上のごとくであった。その数は乏しく、しかも多くは推論の域を出ない。また本稿では、新しいポリスと軍事植民地に焦点をしばり、さらに対象を、ギリシア・マケドニア人と非ギリシア・マケドニア人の相互対応の全体的な性格に限定したために、小アジア西岸の古いギリシア都市における多くの事実が捨象され、より具体的な諸問題——婚姻、特権賦与、宗教、結社、言語、その他——を、ひろくとりあげることができなかった憾がある。その意味では、今後考察を深めねばならない点を多々のこしているというべきであるけれども、当面の問題に対する展望らしきものは開かれたように思う。

新しい土地に移住したギリシア・マケドニア人は、土着人との共存のありかたを慎重に考慮せざるをえず、土着人以外の非ギリシア・マケドニア人の存在もまた、無視できない意味をもっていた。事情は各地で一様といえず、対処のしかたもさまざまであったが、それは複雑な国家の統治に苦慮するセレウコス朝の姿を、なにほどこ反映しているであろう。しかも融和の果実は、多くの場合、容易に実らなかったようである。^⑧

ヘレニズム時代を語るるとき、一般に、前三世紀はギリシア・マケドニア人が発展的生命力をもちえた時代といわれる。都市建設・植民は、その華やかな象徴とみられることが多い。しかし、その実態が上述のようであったとすれば、あらためて考えなおす必要が、そこにはあるように思われるのである。

(一九七一・一〇・二六稿一)

① 建設者についてシモンズは、近辺で発見された碑文 (SEG, VI, 592) に *ἐργαλ[α θεο]* *Νεκροπος* の文字がみえることからの「マナシ」世を考へてゐる。Jones, *CERP*, p. 411 note 10. 「キーン」の考へを論拠として認めるなら (Magie, *op. cit.*, II, p. 1315 note 20) マナシ朝の建設と同一地を肯定する (ibid., p. 457)。マナシ朝の建設と同一地を肯定する (ibid., p. 457)。マナシ朝の建設と同一地を肯定する (ibid., p. 457)。マナシ朝の建設と同一地を肯定する (ibid., p. 457)。マナシ朝の建設と同一地を肯定する (ibid., p. 457)。

② [H. Bouily *krí é ôñhog Neapolitov Anklav* Θ]ορετῶν κοινῶν τῶν παρὰ: W. M. Calder, *AJA* XXXVI [1932], p. 453. cf. W. Ruge, *Neapolis* (15) *RE* XVI, [1955], Spp. 2126~27; Robert, *Villes*, pp. 234~36 et 415.

③ マナシ朝一世による建設の可能性がよいが、確たる理由があるわけではない。しかし、初期セレウコス朝の建設とみることにしての異説はならぬ。Tschirikower, *Städtegründungen*, SS. 37 und 170; Beloch, *op. cit.*, S. 259; Jones, *CERP*, p. 127; Magie, *op. cit.*, II, p. 1316 note 21.

④ 古代ヘルニア語史料にあらわれる「メング」(現メルマ)である。スト

ラホエンティリニアスに於ては、アレクサンデルがアレクサンデルイ
アとして建設したのが、マルス・ローに於ては、荒廢せしめられたの
を、ポンティオロス一世が再建したのだから。Str. XI, 10, 2, p.
516; Plin., *NH* VI, 18, 47, 48; マトリコキアールはアレクサンデル
の建設を疑問視するが、ポンティオロス一世の建設は認める立場を
とっている。Tschirikower, *Städtegründungen*, S. 105. ターンゼ、
ブリニウスの記事に於ける Syrian の語に注目し、移住者中シリヤ
人が大きな割合を占めたことによるニックネームであると主張する。
Tarn, *GHI*, p. 15. しかし、はたしてさうであるかどうか、疑問のあ
るまじくは聞かぬ。

- ⑤ Plin., *NH* V, 31, 120; *JGR*, IV, 1354; Head, *Hist. Num.*, p.
652; マジュレンシアのキオロスが、ゴホルカニア人を移住させた植民地
であった。L. Robert, *Hellenica* VI [1948], p. 19; Jones, *CERP*,
p. 38. マジュレンシア人の移住に關しては Biheman, *op. cit.*, p. 83.
⑥ Plin., *NH* V, 31, 120; Ptol., V, 2, 13; *Alt. Mittl.*, XIX [1894],
pp. 102~03 und 123~24 (筆者未見)。マジュレンシア人とマケドニア人の
共存が考えられるわけだが、その時期は明らかにしがたい。Magie,

op. cit., II, p. 974; Jones, *CERP*, p. 44.

- ⑦ Plin., *NH* V, 32, 123. マジュレンシア人の解釈が可能であるかについて
は Jones, *CERP*, p. 44.

⑧ われわれは、マジュレンシア人の実態分析を試みたことがある（前掲拙稿「セレウ
コス朝の支配とオリエンタル」）。ここでは、従来考えられてきた以上
に、非ギリシア・マケドニア人が登用されていること、それはセレウ
コス朝の支配の脆弱性に起因する現実的計算によるものとみられるこ
と、が結論された。本稿で考察したところは、現実的計算にもとづく
協力関係が生れたとする点、前稿とあい通ずる面をもつが、非融和
的傾向がより強調される点、やや趣を異にする。両稿とも対象を限定
しての考察であるから、こうした相違をどこまで対比的にとらえる
かは、なほ今後の課題としなければならぬが、都市・軍事植民地に
おいては、古くから住むものと新たに移住したものが、限られた地
域内で集団的にあい対するため、彼我を区別したり対立関係におきい
たりすることが、より起りやすかったといえるのではないか。しか
し、しばらくこの問題は留保したいと思う。

（立命館大学文学部助教・）

Greeks and Non-Greeks in the Cities of Hellenistic Asia

by

C. Ohto

The early kings of the Seleucids knew the weakness of their position as rulers over their vast and strange territory. Their empire was a framework which covered a multitude of peoples and cultures, and it was necessary to give the framework substance and strength. To this end, they set to work to fill most of western Asia with Greek cities and settlements. Usually, though by no means always, these cities and settlements were located at or beside native villages and cities, and must have contained many non-Greeks within their walls, though the local natives lived largely in suburbs outside. How were the non-Greeks within the wall organized and administrated?

We cannot throw much light on this question. Circumstances were different in each case and we have too little information. In many cities, however, it seems that non-Greeks were assigned their districts and distinguished from Greeks. It cannot be assumed, as often supposed, that there was widespread harmony between Greeks and non-Greeks.

The Finance of *Han* 藩 in the Early Bakuhan-Regime 幕藩体制 ;

A Case Study of a *Fudai-Daimyo* 譜代大名,

Sakai-Obama-Han 酒井小浜藩

by

J. Fujii

This article will focus on the problem of the reproduction structure of the seigniority of the early Bakuhan Regime 幕藩体制 through a case study of a *Fudai-Daimyo* 譜代大名, *Sakai-Obama-han* 酒井小浜藩.

Though not abundant in its agricultural production, *Obama-han*, economically based on the land-tax revenue which was made possible by the substitution of the unified control over the country for the old local fief system, coped with their rice paid as land-tax lucratively, because of its geographical nearness to *Kinai* 畿内 central market and its familiarity with the economic information as a chief minister of Bakufu. Furthermore, *Obama-Han*, holding *Tsuruga* 敦賀 and *Obama* 小浜 as relay ports between the northern countries and the central countries, levied